

企画展

おらほの

ことば

橘正一 没後80年

2020年

8月1日(土)

10月18日(日)

※8月31日(月) 9月30日(水)は休館

展示資料目録

場所

岩手県立図書館

4階展示コーナー

時間

午前9時～午後8時

岩手県立図書館

はじめに

盛岡市出身の方言学者・橘正一たちばなしょういちが39歳で没してから80年を迎えます。正一はことばを通じて民衆の思想・感情を知り、その歴史を明らかにしたいという思いで、闘病の傍ら全国の方言を研究しました。

日本の方言研究は明治期に一度盛んになり、昭和に入って再び興隆を見ました。当時からすでに方言の衰退は進み、やがては消え去るのではないかという懸念が強まっていました。それらを今のうちに収集し記録しておかなければ永久にその機会が失われてしまうと、半ば愛惜の念に駆られて多くの方言集が編まれたのだと、正一は言います。本企画展では正一の生涯をたどり、日本の方言研究について概観し、さらに岩手の方言を関連資料で紹介します。

全国各地で地方独特の言葉が影をひそめつつありますが、地方の特性・特色が盛んにアピールされる中、そこで使われる言葉——方言の持つ魅力もあらためて見直されていくはずです。地域に暮らす人々が用いてきた昔ながらの言葉を見つめなおし、言葉の豊かさを感じる機会となれば幸いです。

最後になりましたが、開催にあたり、ご協力いただきました関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

凡例

1 収録内容

橘正一に関する資料、方言一般、方言研究に関する資料、岩手の方言にまつわる資料141点を収録しました。

- (1) ガラスケース内展示資料 ————— 87点
- (2) ガラスケース外展示資料 ————— 54点

2 記載順、記載事項について

- (1) ガラスケース内展示資料は、概ね展示順、ガラスケース外展示資料は請求記号順に掲載しました。
- (2) 請求記号とは、当館の整理記号(ラベル記号)です。

K914
フ1
1

新=新渡戸文庫 ケン=賢治文庫 K=郷土資料 S=雑誌
KS=郷土雑誌 CK=郷土 CD DK=郷土 DVD

- (3) 「館外貸出」の欄に“○”が付いているものは、貸出可能な資料です。ただしガラスケース内展示資料は、期間中は貸出できません。ガラスケース外展示資料は、期間中も貸出できます。また貸出中の場合は予約することができます。

目次

▼展示資料目録

【ガラスケース内展示資料】

第1章 橘正一と方言	1
第2章 方言と方言研究	1
第3章 わたしたちの方言	2

【ガラスケース外展示資料】

方言一般に関する資料	4
岩手の方言に関する資料	4
岩手の方言で綴られた資料	5

▼参考資料

.....	6
-------	---

第1章 橋正一と方言

No	書名	編著者名	出版者等	出版年	請求記号/所蔵先	館外貸出
1	写真（橋正一）	—	—	1936	21.5/214/8	×
2	日本民俗学大系 5	大間知 篤三 〔ほか〕 編集委員	平凡社	1959	382.1/1/5	○
3	おてだまの方言 他	橋 正一 著	橋正一	—	K/810/42/3	×
4	新岩手人 第25号-第36号	—	新岩手人の會	1933	KS05/ソ1	×
5	方言学概論	橋 正一 著	育英書院	1936	K/810/42/2	×
6	方言読本	橋 正一 著	厚生閣	1937	K/810/42/1	×
7	岩手教育 第13巻 第1-12号	—	岩手県教育研究会	1935	KS37/113	×
8	岩手毎日新聞（マイクロフィルム複製）昭和5年8月15日「植物方言と児戯」（橋正一）					
9	方言と土俗 第1巻 第1-12号	—	一言社	1930	KS80/ホ1	×
10	東北文化研究 第2巻 第1-4号	—	奥羽史料調査部（東北大学内）	1929	KS20/ト1	×
11	全国植物方言集 上巻	橋 正一 編輯	橋正一	1939	K/810/42/4-1	×
12	全国植物方言集 中巻	橋 正一 編輯	橋正一	1939	K/810/42/4-2	×
13	全国植物方言集 下巻	橋 正一 編輯	橋正一	1939	K/810/42/4-3	×
14	諸国助詞方言集 第1輯	橋 正一 編	橋正一	1940	K/810/42/4-4	×
15	南部藩茶道興隆記	〔橋 正三 著〕	—	1934	21.5/214/28	×
16	もりおか明治舶来づくし	橋 不染 著	杜陵印刷内トリョー・コム	1975	K/211/41/1	○
17	橋不染雑録 5巻	橋 不染（正三） 著	—	—	新/38/4	×

第2章 方言と方言研究

No	書名	編著者名	出版者等	出版年	請求記号/所蔵先	館外貸出
18	日本方言地図	東条操先生古稀記念会 編	吉川弘文館	1956	818/ニホ	○
19	諸国方言索引	吉沢 義則 撰	立命館出版部	1933	818/ヨ1/1	×
20	方言学	藤原 与一 著	三省堂	1962	818/フジ	○
21	方言学論叢 1	藤原与一先生古稀御健寿祝賀論集刊行委員会 編	三省堂	1981	818/フ1/4-1	○
22	柳田國男〔写真〕	—	—	—	遠野市立博物館所蔵	—
23	蝸牛考	柳田 国男 著	創元社	1943	818/ヤナ	×
24	人類学雑誌 第42巻 第1-12号	—	東京人類学会	1927	S469/ジ1	×
25	標準語と方言	柳田 国男 著	明治書院	1949	810.4/ヤ1/3	×
26	方言と昔他	柳田 国男 著	朝日新聞社	1950	380.4/ヤ1/3	×
27	大日本方言地図	東条 操 著	育英書院	1927	818.1/ト1/2	×
28	方言と方言学	東条 操 著	春陽堂	1944	818/トナ	×
29	国語の方言区画	東条 操 著	東京堂出版	1966	818/トナ	○
30	金田一京助〔写真〕	—	—	—	盛岡市先人記念館所蔵	—

No	書名	編著者名	出版者等	出版年	請求記号/所蔵先	館外貸出
31	言霊をめぐるて	金田一 京助 著	八洲書房	1944	K/090/11/22	×
32	国語の進路	金田一 京助 著	京都印書館	1948	K/090/11/54	×
33	新日本の国語のために	金田一 京助 著	朝日新聞社	1948	K/800/11/1	×
34	風俗画報 第314号-第319号	—	東陽堂	1905	S380/71	×
35	音韻口語法取調に関する事項	—	〔出版者不明〕	—	811/11/1	×
36	音韻口語法調査書	九戸郡 編	九戸郡	—	K/811/11/1	×
37	音韻口語法調査書	岩手郡 編	岩手郡	—	K/811/12/1	×
38	音韻調査書	西磐井郡 編	西磐井郡	1936	K/811/11/1	×
39	音韻調査 〔5〕	岩手県教育会 編	〔出版者不明〕	—	K/811/11/1-5	×
40	音韻調査 〔6〕	岩手県教育会 編	〔出版者不明〕	—	K/811/11/1-6	×
41	音韻調査草稿	田鎖 直三 著	田鎖 直三	—	80/6	×
42	岩手県郷土調査要項	岩手県 編	岩手県教育会	1939	K/002/11/1	×
43	本縣の地域性	横田 幸八 [述]	岩手縣	[19--]	K/291.22/30	×
44	岩手県郷土教育資料	岩手県教育会 編	岩手県教育会	1940	K080/11/1-5	×
45	岩手県郷土教育資料	黒沢尻尋常高等小学校 編	阿部膳写堂	1940	K080/11/4-154	×

第3章 わたしたちの方言

No	書名	編著者名	出版者等	出版年	請求記号/所蔵先	館外貸出
46	岩手の方言	森下 喜一 著	教育出版センター	1982	K/810/11/1	○
47	岩手の方言遺稿集	田鎖 直三 著	岩手医科大学国語研究室	1987	K/810/16/3	○
48	諸方言	田鎖 直三 著	田鎖 直三	—	80/5	×
49	紫波方言	田鎖 直三 著	田鎖 直三	—	80/2	×
50	気仙郡方言	田鎖 直三 著	田鎖 直三	—	80/3	×
51	東海岸方言	田鎖 直三 著	田鎖 直三	—	80/4	×
52	岩手日報（マイクロフィルム複製）昭和9年2月16日「岩手県方言学小史」（橘正一）					
53	南部叢書 第10冊	南部叢書刊行会 編	南部叢書刊行会	1929	K/080/11/10	○
54	風俗画報 第138号-第143号	—	東陽堂	1897	S380/71	×
55	岩手方言研究 第2集	小松代 融一 著	岩手方言研究会	1961	K/810/11/1-2	○
56	岩手方言研究史考 続編	小松代 融一 著	岩手方言研究会	1988	K/810/11/1-2-2	○
57	遠野方言誌	伊能 嘉矩 著	郷土研究社	1926	K/810/11/1	×
58	東北方言集	仙台税務監督局 編	東北印刷	1920	K/810/11/1	×
59	鹿角方言考	大里 武八郎 著	鹿角方言考刊行会	1953	K/810/11/1-1	×
60	近世仙台方言書 翻刻編	菊池 武人 著	明治書院	1995	K/810/11/2-1	×
61	近世仙台方言書 翻刻編続	菊池 武人 著	明治書院	1995	K/810/11/2-2	×
62	近世仙台方言書 研究編	菊池 武人 著	明治書院	1995	K/810/11/2-3	×
63	岩手方言の音韻と語法	小松代 融一 著	岩手方言研究会	1976	K/810/11/3	○

No	書名	編著者名	出版者等	出版年	請求記号/所蔵先	館外貸出
64	岩手県の方言	本堂 寛 著	〔出版者不明〕	—	K/818.1/林	×
65	岩手学事彙報 第167-175号	—	九阜堂	1889	KS37/41	×
66	岩手日報（マイクロフィルム複製）昭和8年9月22日「アイヌ語と東北方言との交渉」（橘正一）					
67	世俗言葉 深川若松道行所屋敷 名浄溜理 蝦夷言葉	—ノ倉則文写	—	1937	37/71	×
68	金田一京助論文集	金田一 京助 著	岩手県立図書館	—	K/090/キ1/13	×
69	北奥地名考	金田一 京助 著	金田一京助	—	K/290.4/キ1/1	×
70	阿仁マタギの山詞その他	早川 孝太郎 著	春陽堂	1937	659/ハ1/1	×
71	おらおらでひとりいぐも	若竹 千佐子 著	河出書房新社	2017	K/913.6/ワカ	○
72	吉里吉里人	井上 ひさし 著	新潮社	1981	K/993/42/6	○
73	方言を伝える	大野 眞男 編	ひつじ書房	2015	H/818.2/林	○
74	東日本大震災において危機的状況が危惧される方言の実態に関する調査研究<岩手県>	大野 眞男 編	岩手大学教育学部日本語学研究室	2013	H/818.2/ヒカ*	○
75	杜陵方言考	小本 村司 著	—	1889	80/1	×
76	谷の下水 4巻	黒川 盛隆（司 凹齋） 著	黒川 盛隆	—	新/94/5	×
77	子ども版方言カルタ	褓和人 句	菅原力	2009	K/818.22/スカ*	×
78	みやご弁ほほいろはカルタ2007	「宮古弁カルタをつぐっぺす」プロジェクト 企画・制作・著作	みやごのごっつお	[2007]	K/818.22/ミヤ/2007	×
79	岩手弁かるた 方言詩の世界	本堂 寛 監修	IBC岩手放送	[2009]	K/818.22/47	×
80	岩手弁かるた 複合媒体資料 方言詩の世界 2011	本堂 寛 監修	IBC岩手放送	[2010]	K/818.22/47/2011	×
81	ふるさとかるた	北緯40度地球村 ヴィヴィットネス実行委員会 編	北緯40度地球村 ヴィヴィットネス実行委員会	[1991]	K/810/キ5/1	×
82	岩手弁方言詩の世界 抒情編	語り：菊池 幸見	TOKUMA JAPAN COMMUNICATIONS	2006	CK/G08/47	○
83	岩手弁方言詩の世界 笑いと涙編	語り：菊池 幸見	TOKUMA JAPAN COMMUNICATIONS	2006	CK/G08/47	○
84	岩手弁方言詩の世界 今度こそ完結編	語り：菊池 幸見 伊奈かつぺい	TOKUMA JAPAN COMMUNICATIONS	2009	CK/G08/47	○
85	岩手県田野畑村大芦の暮らしと言葉（方言談話） 1	橋 芳男 語り手 橋 セツ 語り手 牧原 登 聞き手	—	[2015]	CK/G08/47/1	○
86	岩手県田野畑村大芦の暮らしと言葉（方言談話） 2	橋 芳男 語り手 橋 セツ 語り手 牧原 登 聞き手	—	[2015]	CK/G08/47/2	○
87	昔っこ語り聞かぬすか 盛岡弁と一口歴史講座	川原 恵 語り 浅野 孝子 〔ほか〕 語り	カーネーションの会	2007	DK/818.2/ムカ	×

ガラスケース外展示資料

* 以下の資料は、展示期間中も館外貸出できます

方言一般に関する資料

No	書名	編著者名	出版者等	出版年等	請求記号	館外貸出
1	滅びゆく日本の方言	佐藤 亮一 著	新日本出版社	2015	818/サ	○
2	方言論	柴田 武 著	平凡社	1988	818/シ1/6	○
3	新日本言語地図	大西 拓一郎 編	朝倉書店	2016	818/シ	○
4	方言風土記	すぎもと つとむ 著	雄山閣	1986	818/ス1/14	○
5	21世紀の方言学	日本方言研究会 編	国書刊行会	2002	818/ニジ	○
6	はじめて学ぶ方言学	井上 史雄 編著	ミネルヴァ書房	2016	818/ハジ	○
7	方言学原論	藤原 与一 著	三省堂	1983	818/フ1/4	○
8	方言学入門	木部 暢子 編著	三省堂	2013	818/ホ	○
9	方言の形成	小林 隆 [ほか] 著	岩波書店	2008	818/ホ	○
10	方言の文法	佐々木 冠 [ほか] 著	岩波書店	2006	818/ホ	○
11	方言の機能	真田 信治 [ほか] 著	岩波書店	2007	818/ホ	○
12	魅せる方言 地域語の底力	井上 史雄 [ほか] 著	三省堂	2013	818/ミセ	○
13	<国語>と<方言>のあいだ 言語構築の政治学	安田 敏朗 著	人文書院	1999	818/ヤス	○
14	方言の発見	小林 隆 編	ひつじ書房	2010	818.04/ホ	○
15	柳田方言学の現代的意義	小林 隆 編	ひつじ書房	2014	818.04/ヤ	○
16	金田一京助と日本語の近代	安田 敏朗 著	平凡社	2008	K/810.12/キ	○
17	まんがで学ぶ方言	竹田 晃子 著	国土社	2009	K/818/タ	○
18	方言探究法	森下 喜一 著 大野 眞男 著	朝倉書店	2001	K/818/モ	○
19	最新ひと目でわかる全国方言一 覧辞典	江端 義夫 [ほか] 編	学研	1998	K/818.033/ホ	○
20	感性の方言学	小林 隆 編	ひつじ書房	2018	ケ/818.04/カ	○

岩手の方言に関する資料

No	書名	編著者名	出版者等	出版年等	請求記号	館外貸出
21	岩手の俗言	毛藤 勤治 編	岩手日報社	1992	K/389/ε2/1	○
22	日本語つれづれ草	黒沢 勉 著	岩手日報社	1994	K/800/ク1/1	○
23	縄文語の謎	阿部 順吉 著	ふるさと紀行編集部	1996	K/810/75/1	○
24	軽米・ふるさと言葉	軽米町教育委員会 編	軽米町	1987	K/810/カ5/1	○
25	南部のことば	佐藤 政五郎 編	伊吉書院	1987	K/810/カ6/1	○
26	つづれこたゑ	高橋 捷夫 著	豊島書房	1981	K/810/カ4/1	○
27	岩手西和賀の方言	高橋 春時 著	岩手出版	1982	K/810/カ5/1	○
28	諺・譬えことば	留場 栄 著	留場栄	1989	K/810/ト4/1	○

No	書名	編著者名	出版者等	出版年等	請求記号	館外貸出
29	岩手の方言	森下 喜一 著	教育出版センター	1982	K/810/㉔1/1	○
30	岩手の方言をたずねて	森下 喜一 著	熊谷印刷出版部	1983	K/810/㉔1/2	○
31	岩手の方言をアイヌ語に見る	吉田 耕一郎 著	熊谷印刷	1987	K/810/㉔2/1	○
32	もりおか弁入門	菅谷 保之 著	菅谷保之	1998	K/818/㉔*	○
33	東北方言オノマトペ用例集	竹田 晃子 作成	人間文化研究機構 国立国語研究所	2012	K/818. 2/㉔	○
34	いちのへ郷土ことば	折館 一男 編集	一戸町教育委員会	2001	K/818. 22/㉔	○
35	岩手県のことば	斎藤 孝滋 著 [岩手県 著]	明治書院	2001	K/818. 22/㉔1	○
36	宮古のことば	坂口 忠 著	坂口忠	1999	K/818. 22/㉔カ	○
37	宮古のことば 2	坂口 忠 著	坂口忠	2001	K/818. 22/㉔カ/2	○
38	郷土教育資料が語る昭和初期の 釜石のことば	竹田 晃子 著	岩手大学教育学部日 本語学研究室	2015	K/818. 22/㉔	○
39	ふん = あべん	島山 宗太郎 編	島山宗太郎	2004	K/818. 22/㉔ㄱ	○
40	岩手方言の語源	本堂 寛 著	熊谷印刷出版部	2004	K/818. 22/㉔	○
41	ケセン語の世界	山浦 玄嗣 著	明治書院	2007	K/818. 22/㉔マ	○
42	紫波の言葉	山田 長耕 編集	山田長耕	1999	K/818. 22/㉔マ	○

岩手の方言で綴られた資料

No	書名	編著者名	出版者等	出版年等	請求記号	館外貸出
43	ゆりいかが聞いた岩手の昔ばなし	加藤 ゆりい 著	トリョーコム	1982	K/388/㉔4/1	○
44	北上地方の民話 第2集	北上市立図書館 編	北上市立図書館	1980	K/388/㉔4/1-2	○
45	炉端と昔ッコ	菊池 悟 著	菊池悟	1988	K/388/㉔ㄱ/2	○
46	遠野むかしばなし 続・続	工藤 紘一 編集	熊谷印刷出版部	1993	K/388/㉔4/1	○
47	遠野むかしばなし 鈴木サツ自選50話	鈴木 サツ 談	熊谷印刷出版部	1987	K/388/㉔2/1	○
48	とっておきのはなし	NHK盛岡放送局民 話研究会 編著	日本放送出版協会	1978	K/388/㉔1/1	○
49	湯田のむかしばなし	湯田町教育委員会 編	湯田町教育委員会	1978	K/388/㉔1/1	○
50	遠野の昔話 正部家ミヤの語る昔話	正部家 ミヤ 語り	正部家ミヤ昔話CD 刊行会	2005	CK/G08/㉔ㄱ	○
51	遠野むかしばなし	白幡 ミヨシ 語り	キャバシティコミュ ニケーションズ	[1998]	CK/G08/㉔ㄱ	○
52	遠野の語り部 鈴木ワキの世界	鈴木 ワキ 語り	〔遠野アドホック〕	[----]	CK/G08/㉔*	○
53	遠野むかしばなし	鈴木 サツ 語り	キャバシティコミュ ニケーションズ	p1995	CK/G08/㉔*	○
54	釜石漁火の会 須知ナヨさんが語る昔話	大野眞男・竹田晃 子・田中宣廣 作成	岩手大学教育学部日 本語学研究室	[2014]	DK/388. 1/㉔マ	○

橘正一と方言

橘正一



橘正一 35歳（昭和11年10月15日撮影）

橘^{たちばなし}正一^{しやういち}は、明治35年（1902）盛岡市新馬町（現・松尾町）中通りに生まれました。

正一は数学に長じ、大正8年（1919）盛岡中学校の4年級から仙台の第二高等学校理科甲類に入学します。この時、正一の母は、仙台は方角が良くないと言い進学に反対したといひます。医学専攻を志していた正一でしたが、卒業直前、結核による肺浸潤のため、帰郷を余儀なくされます。高校卒業の資格は与えられたものの、そのまま病臥する身となりました。

正一はやがて土俗、方言の研究において、熱心に活動するようになります。

一時健康を回復した正一は、昭和12年（1937）第2学期より、私立岩手商業学校（現・江南義塾盛岡高等学校）及び私立岩手高等予備校の国語教師に就任しました。しかし学校に勤めるようになってから健康状態が再び悪化。約半年後退職し、再び病の床に伏すようになります。正一は病臥中、訪問客を極度に嫌い、特に再悪化してからはほとんど誰にも会わなかったといひます。正一は同15年（1940）、39歳の若さで没しました。

正一の仕事

病身の正一が方言研究を志したのは父・正三^{しやうぞう}の感化もあったと思われませんが、妹の娘には「方言をやっていれば寝ていても食えるからな」と冗談半分に語ったこともあるそうです。

昭和5年（1930）29歳の時、会員組織で『方言と土俗』（謄写版）を創刊します。会員は3府30県にわたり、冊子は200部刷られました。同誌は同9年（1934）通計45冊で廃刊となります。同11年（1936）育英書院から『方言学概論』を出版。翌12年（1937）厚生閣から『方言読本』を出し、翌月重版となります。

正一は「歴史上の無縁の仏」である民衆のために、彼らの歴史を明らかにするという意図を、「土俗方言の学を志して以来、須臾^{しゅゆ}も忘れぬ」と記しています。

正一は病勢が悪化してからも、研究発表のため方言個人雑誌（謄写版）の刊行を計画します。また、昭和3年以来既刊の方言集から13万枚のカードを作成し、これを部門別に分け

ました。正一の編集していた『分類全国方言辞典』は同 14 年（1939）より刊行されますが、第 4 巻を限りに中絶します。

■ 父・橘正三

正一が、病床にありながら土俗方言に興味を寄せたのは、父・正三（雅号：不染^{ふせん}）の影響が大きかったとみられます。

正三は安政 6 年（1859）盛岡市上の橋通り紙町に生まれ、上京して警視庁の巡查となり、西南戦争を経て明治 13 年（1880）自由民権運動の取り締まりのため盛岡警察署に転勤します。しかし翌年、県内で中心的に活動していた自由民権運動結社「求我社^{きゅうがしゃ}」に共鳴して退職。岩手新聞社に入社し求我社の党友となります。その後は八幡町の函番^{はこばん}（芸妓の取次ぎや玉代の精算などを行う事務所）に関わり、芸妓の育成などに努めました。また、民俗や郷土史研究のほか茶道・俳句・邦楽も嗜みました。

正三に関する約 50 点の資料群（主に警察官や消防手の辞令など正三自身の履歴に関する資料や、明治以降に記された盛岡・岩手の風俗・風習や茶道についての資料）が、当館に残されています。



『橘不染雑録 5巻』 橘 不染（正三）著
[当館所蔵]

～第 2 章～

方言と方言研究

方言の位置づけ

ある言語について、語彙やアクセントが微妙に異なりつつも、同時代に、地理的に連続しながら分布しているのが方言の特徴です。政治・経済・文化的中心地で用いられるものを「標準語」あるいは「共通語」と呼び、周辺部で使われるものを「方言」と呼びます。

公共機関、マスメディア、教育現場などで用いられ、日本人の大多数が広く意思疎通を行うために用いているものを戦前までは主に「標準語」と呼びましたが、戦後は教育現場を中心に「共通語」という用語が用いられるようになりました。近世以前については、文化的中心地で用いられた文献資料に現れるものを「中央語」とよぶことがあります。

「方言」ということばを避けて「地域語」と言い換えることや、また、「生活語」として位置づける見方もあります。このことは生活に根差した方言が、多様な言語変種を含む日本

【参考資料】

語の中で重要な役割を担っていることを如実に表していると解釈できます。

方言と地理

方言は、最初から今のような形で用いられていたわけではなく、歴史の流れの中で作り上げられてきたものです。方言地理学(言語地理学)は19世紀末期にヨーロッパで生まれた、地理的側面から方言(言語)を研究する学問で、過去や現在における一時代のことばの地理的分布から、それぞれの場所におけることばの変遷を推定することを目的とします。どこでどのようなことばが使われているかを示す言語地図により方言の分布を扱い、分布の位置からことばの歴史を明らかにしようという、「方言^{しゅうけんろん}圏論」などの考え方に通じる学問です。

基本的に方言は、中央語の地方への伝播と、地方における独自の変化により形成されていきます。中央から地方に伝播しやすいことばは庶民階層の話しことばであり、古典に見られることばが各地に伝わり、方言となって残っている例も多く確認できます。

また方言形成には、背景となる自然や文化・社会の地域性が影響します。ある方言的な特徴が一定の地域にみられる場合、その地域には特有の自然や文化が存在する可能性があるのです。

方言^{しゅうけんろん}圏論

柳田^{やなぎたくにお}國男はカタツムリ(蝸牛)の呼び名の分布を調査し、「蝸牛^{かぎゅうこう}考」を著しました。デンムシ系の呼称を用いる近畿を中心にして、マイマイ系・カタツムリ系などの呼び名で呼ぶ地域が波紋状に広がっていることに、柳田は着目したのです。

山地や辺境に古い風習や語彙が残るという現象に着想を得た柳田は、方言の要素が文化的中心地を中心として同心円状に分布するという「圏分布」を見出しました。文化的中心地の言葉は周辺部に伝播し、受容されて広がっていくため、中心地から地理的に近い地域には発生の新しい言い方が分布し、遠い地域には発生の古い言い方が残ると考えられます。こうした考え方を柳田は「方言圏論」と名付けました。

圏分布の中心地は、新しい文化事象を生み出し周辺部に影響を及ぼし得る「都」であり、長らく近畿中央部がその位置にありました。圏論は語彙の分野において当てはまりやすく、音韻やアクセントの分野においては周辺部の地域で独自の変化が起こるという考え方「方言孤立変遷論」が当てはまりやすいといわれ、時に逆圏論的な分布例も見られます。

■ 柳田國男と方言

民俗学者・柳田國男（1875－1962）は、昭和方言学の父とも目されます。著書『^{のちのかりことばのみ}後狩詞記』には宮崎県^{しいばそん}椎葉村における狩猟伝承の実態のほか、当地の民俗語彙も記録されています。雑誌『郷土研究』には4巻1号（大正5年4月）から方言欄が設けられ、柳田はここに本名や変名で執筆しています。方言研究における柳田の本格的活動は、昭和に入ると同時に始まりました。

柳田は『人類学雑誌』42巻第5号（昭和2年4月）に「蝸牛考」を発表。その後『民族』その他の雑誌に次々と多くの方言論文を発表しました。これが土俗学者へ与えた影響は大きく、方言採集家の大多数が土俗学者なのは柳田の影響と考えるほかはない、と橘正一は記しています。土俗学とは民族学・民俗学の旧称です。昭和5年（1930）「言語誌叢刊」の一冊として『蝸牛考』が出版されました。この書は実質的に方言学概論ともいべき内容を兼ね備えており、方言圏論がその中で説かれています。



柳田國男

[写真提供：遠野市立博物館]

方言区画論

方言を広範囲にわたって調べ、その範囲（地域）が方言によってどう分割されるかを考えた時、分割されたそれらの各地域を「方言区画」といいます。そして音韻・アクセント・文法・語彙など、多くの言語事象の境界を考えながら全国の方言を分類し、地理的な区分けをする研究を「方言区画論」といいます。個々の言語事象による分類では、東西で分かれるものや、中央・周辺の関係が見られるものがあります。「方言区画論」の先駆的研究者である^{とうじょうみきお}東條操は、音韻と語彙と文法を総合的に判断して全国の方言を分類し、日本の本土方言を大きく東部・西部・九州の3つに分けました。

隣接する地域間で異なる語形が分布している場合、そこに境界が存在し、その境界線のことを^{とうごせん}等語線といいます。等語線は北アルプスを経る^{いといがわ}糸魚川・^{はまなこ}浜名湖線に集まっており、ここに方言において日本を大きく東西に分ける「東西方言境界線」が引かれます。

世界中の多くの言語で方言区画論の研究が行われていますが、現代の若年層は共通語化が進んでいるため、従来の方言区画は曖昧になってきています。

【参考資料】

■ 東條操

東條操は明治17年(1884)東京生まれの国語学者です。同43年(1910)東京帝国大学文科大学国文学科を卒業し、幾つもの学校・大学で教鞭を執ります。そして主に各地の方言文献を基に研究を行い、「方言区画論」を展開して、日本の方言研究の開拓や方言学の基礎確立に功績を残しました。

大正12年(1923)、計画していた「日本方言資料」の最初の一冊である『南島方言資料』の頒布が関東大震災によって阻まれ、東京帝大の国語研究室に預けてあった方言書も全て灰燼に帰しました。当時、国語調査委員会に関係していた東條は、全国の方言調査に従事していましたが、数百枚の原稿と900通の基礎資料もまた、炎に包まれました。しかしその後、東條は昭和2年(1927)『国語の方言区画』『大日本方言地図』、翌年『方言採集手帖』を発行。昭和方言学の礎石が据えられます。

東條は同15年(1940)日本方言学会を創立。同41年(1966)82歳で没しました。

■ 金田一京助

金田一京助^{きんだいちきょうすけ}は明治15年(1882)盛岡市四ツ家町^{よつやちやう}(現・本町通)に生まれました。同37年(1904)東京帝国大学文科大学に入学。アイヌ語研究を志し、初めてアイヌ叙事詩ユーカラを世に紹介、アイヌ語が学問的に解明されました。金田一は昭和10年



金田一京助

[写真提供：盛岡市先人記念館]

(1935)文学博士、同16年(1941)東大教授、同43年(1968)國學院大學名誉教授となります。

同10年(1935)頃からは国語学の研究にも携わり、諸辞典の編纂や教科書の編修も広く行いました。金田一は国語審議会委員として終戦後の国語改革に関わり、その論文「方言は保存すべきか」において「全国隅々まで共通語に統一されて行くことは、文化国家の理想である」とし、方言は「この貴重な資料を、是非とも、完全に調査記録して置かなければならない。そのことは、現代人の負ふ後世の学界に対する責任である」と述べています。

金田一は同29年(1954)文化勲章を受章、同46年(1971)89歳で没しました。

音韻口語法取調

「音韻口語法^{とりしらべ}取調」は国語調査委員会により、明治末期に実施されました。この調査は2回にわたって行われ、第一次は明治36年（1903）9月、音韻に関し29条、口語法に関し38条の調査項目で各府県の教員に依頼され、およそ翌年4月までに答申書が回収されました。調査の目的は、言文一致体の採用・口語文法と標準語選定に関する資料収集、発音矯正・国語教授の改良、口語法の異動・変遷の解明、方言区画の確定でした。この回答は同37年から40年（1904－1907）の間に、音韻・口語法の各報告書や方言地図としてまとめられました。この調査結果に基づき東西方言境界線が明示されたことは、方言学史上大きく評価されています。

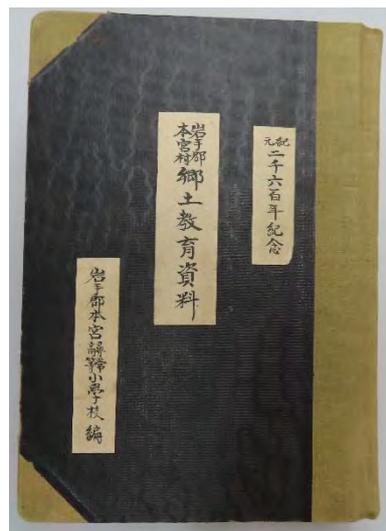
第二次の取調は同41年（1908）3月、音韻に関し41条、口語法に関し90条の調査項目で実施され、各府県からの報告をもとに分布図と報告書がまとめられますが、刊行待機中に関東大震災で焼失したとされます。しかし実際には調査結果は、教育雑誌の掲載物や報告資料集、稿本や提出物の複写控えなどの形で、各地に散在していることが知られています。

郷土教育

郷土を教材とする教育活動「郷土教育」は、明治期に地理教育の準備段階として導入されたもので、大正期には郷土研究（民俗学）の隆盛を背景に、柳田國男、新渡戸稲造らの「郷土会」により、その必要性が説かれました。昭和5年（1930）、文部省嘱託の小田内通敏らを中心に「郷土教育連盟」が結成され、その活動は文部省主導で推進する「郷土教育運動」へと組み込まれていきます。

文部省は同5・6年（1930－31）、師範教育費国庫補助金の一部を、師範学校における郷土研究施設費として交付しました。これを経費として「郷土研究」＝「地方研究」の素養を身につけた教師の養成や児童の郷土理解を図り、あるべき郷土の建設を志向したのです。同6年（1931）には師範教育に「地方研究」が課せられ、また文部省主催の「郷土教育講習会」が全国各地で開催されるようになります。

昭和初期、世界大恐慌の影響で農村は疲弊していました。郷土教育運動は、郷土へ関心を向けさせることで郷土愛を高め、郷土の立て直しと国民の生産力の向上を図るものでした。



『岩手県郷土教育資料』（岩手郡本宮村）
岩手県教育会／編 昭和15年
〔当館所蔵〕

【参考資料】

郷土教育資料

郷土教育運動のもと、各地で盛んに実施された郷土調査に基づき、提出された調査報告「郷土教育資料」が残存しています。

昭和15年（1940）は神武天皇即位紀元二千六百年にあたり、有史以来国威が最も高揚した時代で、国家を挙げて各界が各種行事を計画実行しました。

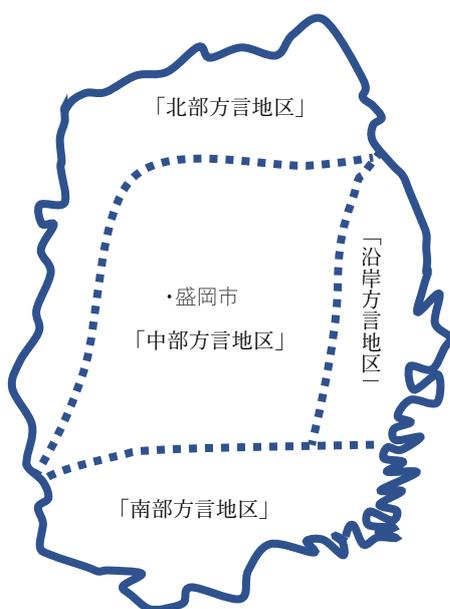
岩手県及び県教育会は県下の各小学校に対して指導的な立場をとることで、同10年（1935）から同15年にかけて皇紀二千六百年記念事業として、郷土調査報告書類の作成を進めました。この事業のために同11年（1936）から5か年にわたり、郷土研究調査に関する講習会が開催されます。調査項目は地理・歴史・産業・生活等多岐に及びました。その中には方言も含まれており、報告書類は当時の県内の方言を知る貴重な資料となっています。これに先行する形で同11年前後の時期に、同じく県下の小学校が行った方言に関する調査報告もあり、「郷土教育資料」に関係するものと見られています。

～第3章～

わたしたちの方言

岩手方言の区画

東北方言は北奥羽方言と南奥羽方言とに分けることができます。北奥羽方言は青森、秋田、岩手北部・中部、山形庄内、新潟北部を含み、やや西日本方言的な要素があるといわれています。南奥羽方言は岩手南部、宮城、山形内陸部、福島を含み、関東方言とのつながりが濃厚です。



参考：本堂寛氏の図（『岩手百科事典』より）

このように岩手方言は、その内部が大きく二つに分けられます。全県の約3分の2を占める北部・中部地域（旧南部領）と、残り3分の1の南部地域（旧伊達領）の境界線は北奥羽方言と南奥羽方言との境界にもなっています。

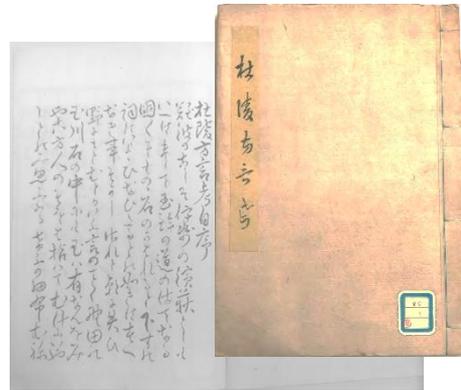
日本語学者・本堂寛^{ほんどうひろし}は、主として語彙・文法の分布から、これをさらに小方言区画に分けました。

まず盛岡を中心とした純粋の南部領方言地区（中部方言地区）。南部領方言の要素を持ちながら隣接する青森・秋田両方言の影響を多分に受け、これら三方言の入り混じった地区（北部方言地区）。北部・南部を除い

た沿岸地域（沿岸方言地区）。そして旧伊達領にあって、伊達方言の用いられている地区（南部方言地区）の4つの区画です。

岩手の初期方言研究

南部藩士・服部武喬は寛政2年（1790）『御国通辞』
 を著しました。この書は日常使用語彙およそ570語に
 ついて14門に分け、江戸語と盛岡方言を対比して示し
 たものです。寛政11年（1799）には黒川盛隆の『谷の
 下水』、明治時代初めには小本村司の『杜陵方言考』
 （1877頃）といった語彙集が出されています。また、
 田鎖直三は小学校の校長をしながら方言収集とその研
 究に取り組み、『東海岸方言』『気仙郡方言』など各地の
 方言をまとめました。明治36年（1903）国語調査委員
 会が全国の方言調査を実施して以来、各地域の小学校



『杜陵方言考』小本村司著
 明治22年(1889)
 [当館所蔵]

などでも方言調査が盛んに行われるようになります。昭和元年（1926）の伊能嘉矩による『遠野方言誌』は音韻についても詳しい説明があり、貴重な資料とされます。

その後、岩手県のみならず、日本の方言研究の先駆者となった橘正一が現れます。また、小松代融一は主に語彙及び方言研究史の研究に業績を残し、数多くの論文・著書を著しました。本堂寛は言語地理学的研究や共通語化の実態研究を進め、佐藤亨は、方言の語史を明らかにしようとしました。

アクセント・音韻

岩手方言のアクセントに関しては、特に宮古を中心とした沿岸中北部地域では、東京式アクセントと体系的によく似ています。南部地域では、その中でも特徴的で曖昧なアクセントが多く見られるようです。岩手方言では、一語の中でアクセントが高くなるとすれば一音節だけが高くなり、それ以外は平板に発音されるという特徴が見られます。それぞれの地域のアクセントには体系があり、地域ごとのアクセント体系と各語の対応も、整然としています。

音韻の特徴としては、イ段の音は唇を丸めないウ段の音に近く発音され、逆にウ段の音はイ段に近く発音されます。単独の母音イはエに近い発音、逆に単独の母音エはイに近い発音となり、アとイが連続するとエやエァなどと発音される傾向があります。語中語尾のカ行音、タ行音は濁音化し、語中語尾のガ行音は鼻濁音となり、ハ行音はフの子音（無声両唇摩擦音）

【参考資料】

で発音されることがあります。また、語中語尾のガ行音・ダ行音・ザ行音・バ行音の直前には、多く鼻音が挿入されます。

文法

岩手の方言では、文法上の特徴として、以下のようなものがあります。

- ・動詞の語幹がラ行化することがあります。(例：「起きら-」「受けら-」「来ら-」「寝ら-」)
- ・北部・中部地域では動詞「す(する)」に特徴的な活用形があります。(例：「さ-ない(しない)」「せ-ば(すれば)」「せ(しろ)」)
- ・動詞の未然形に「ば」が付くことで仮定を表します。(例：「行か-ば(行くならば)」「開^あけら-ば(開けるならば)」)
- ・主として北部・中部地域で、活用語の終止形に助動詞・助詞が付くことがあります。(例：「書く-す(書きます)」「居る-ども(居るけれども)」「見る-に(さ)-行く(見に行く)」「寒い-ば(寒ければ)」)
- ・南部地域では、動詞の連体形が音便化することがあります。(例：「乗っ-時(乗る時)」「来^くっ-時(来る時)」「起きん-べえ(起きるべえ)」)
- ・可能表現として、動詞に助動詞「れる」が付きます。(例：「起き-れる(起きることができる)」「来-れる(来ることができる)」)
- ・北部・中部地域には、自発表現の助動詞「さる」があります。(例：「書か-さる」「起きら-さる」)
- ・意志・推量表現の助動詞「べえ(ぺえ)」は、終止連体形に接続します。(例：「行く-べえ(行こう)」「そう-だ-べえ(そうだろう)」)
- ・丁寧な表現の助動詞「す」は、名詞や活用語の終止形に付きます。(例：「いま、行くす(行きます)」「あれが岩手山す(岩手山です)」)
- ・過去表現の助動詞「たった」は動詞の連用形に付きます。(例：「行っ-たった(行った)」)
- ・回想・伝聞の助動詞「け」は活用語の終止形に促音が挿入されます。(例：「行っ-たっ-け」「居るっ-け」)
- ・格助詞「が」「は」は、省略または直前の語に吸収される形が多いです。(例：「雪降る」)
- ・方向・目的・結果を表す格助詞「さ」があります。(例：山さ行く)
- ・北部地域に格助詞「を」にあたる「ば」があります。(例：飯ば食う)
- ・並列を表す格助詞「や」にあたる「だの」があります。(例：あれだのこれだの)
- ・北部・中部地域に理由・原因を表す接続助詞「すけえ」「さけ」「へで」「はんで」があり、活用語の終止形に付きます。(例：「雪降るすけえ(雪が降るので)行かない」)
- ・逆の関係を示す接続助詞として、北部・中部地域に「ども」、南部地域に「けんとも」が

あり、いずれも活用語の終止形に付きます。(例:「雪降るども(雪が降るけれども)出かける」)

アイヌ語

アイヌ人固有の言語「アイヌ語」と日本語とは言語学的に系統が異なるとされ、アイヌ語は方言ではなく別の言語として位置づけられています。日本語との関係について金田一京助は、アイヌ語の文法構造などから無縁であるとし、言語学者・服部四郎^{はっとりしろう}は語彙や文法構造などから、必ずしも無関係とは言えないという説を出しています。

一般に日本語とアイヌ語、双方の語彙には貸借関係があるとみられ、日本語からアイヌ語に入った語や、数は多くないまでも、「サケ(鮭)」「エゾ(蝦夷)」のように日本語の共通語に取り入れられたアイヌ語があります。東北地方の山間部における狩人「またぎ(まだぎ)」が使う「山ことば」の中に取り入れられたアイヌ語もあります。山ことばはまたぎが山中だけで使用する言葉で、100語ほどが知られています。仲間内で用いられる符丁のようなものであり、忌み言葉とも捉えられます。

また、「-ナイ」「ポロ(ホロ)-」「-ウシ」などアイヌ語とみられる地名が岩手に多いのは、かつてそれぞれの地にアイヌ人の集団が居住していたためと言われます。

方言の行方

昔は「ことばは国の手形」と言い、どんなことばを使うかによってその人の生育地が分かりました。交通が不便だった時代、各地域でことばの違いは大きかったはずですが、やがて共通語化が進み、以前に比べ方言の差は小さくなりました。これは長い目で見ると、古代以来の方言統合過程の一環と捉えることもできます。各地で伝統的な方言を日常的に使う人は、若年層に減り、ある程度年齢の高い人に偏ってきています。社会の変化とともに、地域のことばも大きく変化しました。ユネスコは消滅の危機にある言語として、アイヌ語、八重山語(方言)、沖縄語(方言)など日本の8つの「言語」(方言)を認定しています。

一方、現代社会では、マスコミや交通の発達などを通じて、一般の人々が方言に触れる機会はむしろ増え、方言を積極的に評価する傾向も見られるようになりました。今でも全国各地で新方言が生まれ、他地域へと伝播しています。

方言はその底力を発揮しながら、今も様々な場面で活用されます。これは各地域に住む人々の、方言に対する強い思いの現れと言えます。

主な参考文献

【第1章 橘正一と方言】

- 『方言読本』橘 正一//著 厚生閣 1937
『方言学概論』橘 正一//著 育英書院 1936
『岩手方言研究 第2集』小松代 融一//著 岩手方言研究会 1961
『岩手方言研究史考 続編』小松代 融一//著 岩手方言研究会 1988
『日本民俗学大系 5』大間知 篤三//〔ほか〕編集 平凡社 1959
『もりおか明治舶来づくし』橘 不染//著 杜陵印刷内トリョー・コム 1975
『橘不染』一ノ倉 則文//著

【第2章 方言と方言研究】

- 『方言学入門』木部 暢子・竹田 晃子・田中 ゆかり・日高 水穂・三井 はるみ//編著 三省堂 2013
『21世紀の方言学』日本方言研究会//編 国書刊行会 2002
『方言論』柴田 武//著 平凡社 1988
『はじめて学ぶ方言学 ことばの多様性をとらえる 28章』井上 史雄・木部 暢子//編著 ミネルヴァ書房 2016
『<国語>と<方言>のあいだ 言語構築の政治学』安田 敏朗//著 人文書院 1999
『郷土教育運動の研究』伊藤 純郎//著 思文閣出版 2008
『蝸牛考』柳田 国男//著 創元社 1943
『金田一京助全集 第3巻』金田一 京助//著 金田一京助全集編集委員会//編 三省堂 1992
『方言を伝える 3.11 東日本大震災被災地における取り組み』大野 眞男・小林 隆//編 ひつじ書房 2015
『東日本大震災において危機的状況が危惧される方言の実態に関する調査研究<岩手県>』大野眞男//編 岩手大学教育学部日本語学研究室 2013
『新村出自筆「東西語法境界線概略」の成立再考—新村出と大槻文彦による三枚の地図をもとに—』竹田 晃子 岩手大学人文社会科学部紀要第98号 2016

【第3章 わたしたちの方言】

- 『岩手百科事典』岩手放送岩手百科事典発行本部//編 岩手放送 1988
『岩手の方言』森下 喜一//著 教育出版センター 1982
『岩手の方言遺稿集』田鎖 直三//著 森下 喜一//編 岩手医科大学国語研究室 1987
『岩手方言の音韻と語法』小松代 融一//著 岩手方言研究会 1976
『岩手県の方言(『講座方言学4』北海道 東北地方の方言 別刷)』本堂 寛//著

参考ウェブサイト

- ・ ジャパンナレッジ Lib <https://japanknowledge.com/library/>

展示資料目録

おらほのことば ～橘正一没後 80 年～

発行日 令和 2 年 8 月 1 日

発行者 岩手県立図書館

〒020-0045

岩手県盛岡市盛岡駅西通 1-7-1 いわて県民情報交流センター・アイーナ内

TEL 019-606-1730 FAX 019-606-1731

HP アドレス <http://www.library.pref.iwate.jp/>
